

卷 頭 言

気象学の広く高く深い発展のために

理事長 岸保勸三郎

昨年春に気象研究所は筑波研究学園都市に移転し、新施設や新しい環境の中で活発な研究活動が行われるようになった。このような事情にかんがみ、気象研究所の内田、村山、杉村各理事にとくにお願いして、気象研究所の今後の研究活動、また大学関係者などの希望も含めて、巻頭言についてのコメントをお願いしたところ、幸い当面の学会活動の進めかたについて貴重なコメントを頂いたので、これをもとにして巻頭言を書く次第である。

1. FGGE のデータ

FGGE は国際協力のもとに1978年12月より1979年11月まで1年間実施され、わが国も MONEX, POLEX を含めて参加した。

また、「ひまわり」は1977年10月に打上げられ、そのデータは生データ、処理済データともいろいろの利用に供されている。

このようなデータは目下 WDC (アメリカ・アッシュビル) に集められ膨大なものになっている。この FGGE のデータは史上はじめて全球的規模で集積されたもので、質、量ともに今後の利活用によってはかり知れない研究成果が期待されている。

この観点から FGGE のデータをどう保管し、どう利用するかが日本の研究者にとって大切な課題となっている。

このデータの内容としては、たとえば気象研究所では

Level II b, III a などをまず利用したいと考えている。また、WDC よりこの期間のデータ以外に、この期間の「ひまわり」の生データ (MT) は気象衛星センターに保管されており、今後の保管問題も全庁的に検討されつつある。

このような大規模、大容量のデータを各自勝手に利用しては、長期的研究効率は上らない。まずユーザーのニーズを具体的に集めて分類し、分散保管システム (これが効率的な場合) を確立し、官庁も大学も具体的役割を討議しつつ協力しなければならない。

データベース、データバンクは今や研究の進展に欠くことのできない課題となってきた。学会の長期計画委員会でもこの課題を討議中であるが、会員各位の積極的な提言を期待したい。

2. Engineering meteorology

一般にいう応用気象には、人間活動への応用にかかわる気象として、災害・水理・産業・環境および人工気象などが含まれるが、応用気象学としての学問分野はまだ確立されていないように思える。

今まで日本の大学の大気物理、気象学部門では応用気象は研究対象外とされ、一方、工学や農学の人達の必要性から独自の研究としてとりあげられてきた。近年、社会的要請から応用気象とくにそのうちの engineering meteorology と呼ぶべき分野の発展が望まれている。55年秋季大会シンポジウムでとりあげられた集中豪雨とダム

管理の問題や、数年来環境科学というテーマの下でとりあげられている大気汚染度の移動・反応影響といった問題、また都市建築論と気象との関連などの必要性から生じた個別研究が進められているが、今後はこれらを engineering meteorology として総合化することが大切になってこよう。気象研究所や大学関係者によってこれらの問題の研究に答えるべく今までも種々の見地からとりくまれてきたが、今まではとかくアカデミズムな色彩が濃く、理学的な考察探究に片寄りすぎているきらいがあった。理学と工学をミックスしたものとしてとらえるいわゆる学際的な研究が望まれるところである。その際、meteorological engineering か engineering meteorology かの討論は今の段階では尚早であろうと思うが、とにかくこのような学際的な研究に多くの気象研究者が目をむけることが必要であろう。

3. 研究の再考

近頃の研究は細分化と、これの総合化といった相反するものの共存緊張であるといわれる。このような時にこそ研究には歴史的反省を含めた独創性が必要とされる。そうでないならば、いたずらに研究目的を失った細分化、または総花的な総合化に終始してしまうであろう。研究の新鮮味のあるオリジナルティは研究自体の正しい位置づけから出てくるのであろうし、これあってこそ研究管理も正しく行われるのであろう。

1981年には IAMAP の総会や、海洋や気象衛星の国際会議があり、1982年はわが国の気象学会 100 周年を記念して気候と海洋、熱帯気象の国際会議もひかえている。

このような時にわれわれは国外、国内からの期待の大きいことに驚かざるをえない。20世紀の世紀末に大きな希望と反省をもって研究に直面したいものである。